



ヤマトタケル×宮本伊織
再録掌編集

たーみーちーか

- ・有明方すら疾うに過ぎ

剣伊（剣↑伊？）＋カヤちゃん セイバー不在 1 周目エンド後

初出・2024-02-20

- ・夜を籠む

恐らくセイバーが超絶口下手スキル「口が災いの元過ぎ」を炸裂させ最悪のすれ違いをしている剣伊

初出・2024-07-16

- ・逆行剣鬼伊織くん 〳私の喚び人、私のことが好きすぎる〳

可惜夜って大満足ハッピーヤッピーで死んだのに目を覚ますと盈月の儀 1 日目だった逆行剣鬼伊織くんが、セイバーを初日からクソ甘やかすせいで日の本の大英雄ヤマトタケルがぐっちゃぐちゃになる話

初出・2024-07-30

- ・異世界イオリ 〳1 周目ED後に異世界召喚されたら男の聖女になった件〳

※タイトル通り

※むちゃくちゃモブ出ます

初出・2024-11-04 書き下ろし追加・2025-02-16

有明方すら疾うに過ぎ

今夜の月は、やけに明るい。

……怖いくらいに。

破れた障子の隙間から、カヤは外を見やった。

血の繋がらない兄の住む此処は、幽霊長屋と呼ばれて久しい。昼もたいした人通りはなく、夜になれば更にひとけが消える。

擦り切れたびれ打ち捨てられた家々は、まるで墓標だった。賑わっていたかつてが葬られた、詣でる者すらない墓。月だけは彼らをまだ覚えていて、視線に代わって雲間から光を降らす。ぬくもりのない冴え冴えとした月光だけを。

そこまで連想してから、カヤは首を振った。

自分が気弱になってどうする。

目尻に溜まった涙を、更に首を振って、勢いで飛ばす。拭わない。拭えない。両手は共に忙しい。

「……兄ちゃん」

カヤの右手と左手は、長屋の畳に横たわる、兄の手に繋がれている。

煎餅のように薄い布団の上で、兄の伊織は淡々と呼吸する。すうと深く吸い、すうと深く吐く。ひたすらにそれを繰り返す。回り続ける水車のように、穏やかに静かに単調

に無為に。

目を閉じた顔は、風のような。苦しみも痛みも感じられない。……同じくらい、熱も血潮も。冴えるばかりのあの月のように。

抑えていた不安が膨れ上がり、カヤはぎゅっと目を閉じ俯いた。

カヤの兄は、伊織は、強い。剣の腕は随一だし、身の丈も大きく丈夫で、頭もいい。

だが、どこか不安定なところがあつた。目を離れた隙に、ふっと消えてしまうような。何か恐ろしいものに連れて行かれて、二度と戻っては来ないような。

酷く怖く、寂しくなつて、カヤは一層強く目を瞑り、思わず腕にまで力を込めた。

「……………カヤ？」

はっ、と顔を上げる。

起こしてしまった。

「兄、ちゃん」

「なんだ……おまえ、何をして……ああ」

ふるり、と睫毛が揺れた。寝転んだまま、伊織は周囲を見回す。

それから随分、ぼんやりした声で言った。

「もう、夜か」

「……うん」

「こんな夜刻に、何故此処に」

「うん」

「うん、ではないぞ。……おまえ、何時頃から？」

「正午過ぎかな」

「……ずっと居たのか？」

「ずっと寝てたじゃない」

「それは、すまなかった」

「今日だけじゃ、ないよね」

「心配無用だ。病も怪我もない」

「知ってる」

「そうか。なら……早く帰りなさい」

「うん」

「カヤ？」

「……暗くて、怖いから。……送ってくれる？」

「当然だろう」

伊織は優しげに微笑んで、ゆっくりと起き上がった。

簡単に身を整えて、腰にいつもの二振りを挿す。

カヤはその光景を、ただ見上げている。

何もできずに。

「行くぞ」

「うん」

長屋の戸が開かれる。

月影の下に、伊織が躍り出た。何気ない様子で、精彩を欠いた仕草で、けれどどこか美しく。

カヤは、冷たい光を浴びる兄を追う。

太平の江戸は、いつもは明るく騒がしくて、けれどいまは寝静まっていた。

この世とあの世の間のような、どこか現実感のない道を、二人で歩く。

穏やかで、静かで、優しいのに——叫び出したいほど不安な、夜の道を。

「兄ちゃん」

「うん？」

カヤは、兄にずっと、云いたい事があった。

何処にも行かないで、と。

連れて行かないで、と。

でも……だけで。

いまよりはその方が、ずっとマシだ。

「あかし、知ってるよ」

「何を」

「兄ちゃんの、本当のお願い事」

気づいたのは、少し前。強くて綺麗なあの人が、消えてしまった頃。

自分の中からも何かが消えて……その残滓から感じて知った。

「ね。私、手伝うよ。いくさでも、でなくとも、なんだっ
てお手伝いするよ」

「……」

「私がきつと探してあげる。いくさ絡みは本分だよ。だっ
て武家の娘だもん」

「……カヤ」

「きつとあるよ。兄ちゃんが行きたいところ。兄ちゃんが
生きたいところ。ないならほら、作ればいいし。うん、簡
単に諦めるなんてよくないよね！」

「カヤ」

「だから、死なないで」

ぶら下がっていた腕を両手で掴む。床の傍でそうしてい
たように。

月みたいに冷たくて、熱も血潮もないようで。……まる
で命がないように。

「死なないで、兄ちゃん」

本当は叫びたいのに、出てきた声は囁くようだった。

喉が震えて、声量が出ない。視界が滲む。世界が滲む。
感情が重く膨れ上がって、俯き縋って蹲りたくなる。

それでも力を振り絞り、見上げた伊織の表情は……いつ

もとまるきり同じだった。

あの人がいなくなつてからの、幽霊のような兄と、同じ。

「死ぬものか」

「……なんで」

「病も怪我もしてない。剣を振るう危うい仕事も、近頃は
もうないんだ」

「違う、違うよ……」

「稼ぎ口は別に見つけた。過ぎた鍛錬もしていない。この
平かな風の世で、案ずる事などそうないさ」

「そうじゃなくてえ……!!」

「いいんだ、カヤ」

声色に、僅かな熱。

伊織の視線が、カヤから逸れる。土、木々、街並み、雲、
瞬く星々、あらゆるものから逸れていく。

向く先は、夜の月。

遙か遠くの天に座し、雲間より輝く、唯一つ。

「正直に云おう」

迷った時もあった、と。

「その道が正しくとも、贖ひとつ、是とするなら。ならば
もう……もう、よいのではないか、と」

男は呟く。懺悔ではなく、事実として。

「だが。……その選択は、きつと。あれを、何より傷つけ、

苦しませただろう」

「……あれ、って」

「それもまた、良いとも思えた。一振りの剣として、あれと打ち合い、打ち壊し……あるいは打ち壊されるなら。しかし人として……ああ、いや、違うな……」

空を渡る雲が途切れた。

月がその全身を露わにして、冴え冴えと伊織を照らす。

無感情に、無感動に、故にこそ鋭く凜として。

「——あの日。俺は、美しいものを見た」

初めに焼きついた月こそは、湊を去って消えてしまったが。

あの月は隣にあった。強く眩く傍にいた。言の葉を手を交わせた。心を想いを理解できた。

故に、思った。

美しいものを。

己ではなく、かれにとつて。

「だから、いいんだ。いいと決めた」

月に焦がれ、手放した男は、そう締め括った。

そして再び、カヤを見る。

カヤもまた、伊織を見た。

声に、瞳に、もう熱はない。柔らかで穏やかな風と、虚ろな残滓があるだけの。

「……本当に？」

「俺にはこれしか返せぬからな」

「どこにもいないし、もう会えないのに？」

「そうだな」

「一生、これから、死ぬまでずっと？」

答えは返って来なかった。

それに代わる微笑みだけが、夜の中で淡く輝いている。

「……帰ろう、カヤ」

兄が手を差し出してくる。

うんと小さな子供の頃、迷子になったカヤを迎えに来てくれた時のように。

いま道を失って彷徨うしかないのは、兄自身の癖に。

「……」

「カヤ」

兄の手を握る。

冷たい。熱のない。血潮のない。ただ、優しさだけが変わらない。

「帰ろう」

「……うん」

月が見下ろす夜の道を、二人で一緒に歩きながら。

カヤだけの帰り道を、手を繋いで行きながら。

……生まれて、初めて。

カヤは人を恨めしく思った。怒り、憤り、呪いすらした。
ああ、どうして。

どうしてのですか。

どうして、兄を連れて行ってくれなかったの。
セイバーさん。

夜を籠む

妹がいたんだ。

ああ、無論カヤもそうだが。俺が『宮本』になる前の話だよ。お前よりずっと背丈の低い、小さな子供だった頃の話だ。

妹は。あの子は父親似で、俺は祖母似だったらしい。

似てない兄妹だとよく云われた。

だけど、笑った顔だけはそっくりだ、とも。そしてあの子はよく笑う子供で、俺はそれに笑い返すのが好きだったから、俺たちは結局よく似てたんだ。

あの子はいつも俺の後ろについてきて、あんちゃんあんちゃん、嬉しそうにしていた。何がそんなに嬉しいのかは、俺には解らなかつたものだが。とはいえ、俺は兄だったからな。父親が漁に使う網を繕いながら、あの子の面倒を見るのは日課だった。今で云う剣の鍛錬のようなものだ。毎日毎日、繰り返す。積んで重ねて、日々を送る。

母親は身重でな。翌年には、もう一人妹か、弟が増える予定だった。幼いながら張り切っていたものだよ、俺も。まあ、無意味だったが。

結局、妹だか弟だかは、胎の中で死んでしまったんだ。母さんごと串刺しにされて。

俺はあの時、納屋にいてな。

繕い終わった網を、片付けていたんだ。当然、あの子も

一緒だった。あの子は、俺の後ろについてくるのが好きだったから。

俺たちは、納屋の戸の隙間から、母親が腹を裂かれたのを見て、父親の首が飛んでいくのを見た。

あちこちから、悲鳴や怒声が聞こえていた。知らない大人の男たちが、村のみんなを殺し回っていた。

あの子は、震えて涙を流していたが、叫ばなかつたよ。小さいのに賢い子だったんだ。本当に。

俺は、あの子を抱きしめて、一緒に納屋の奥に隠れた。

まあ、隠れると言っても、隅に縮こまるくらいしか出来なかつたのだが。納屋には大したもの置いていなかったんだ。だからすぐ、見つかつてしまった。

血のおいにする男たちに、腕を掴まれて。

俺たちは納屋から引きずり出された。そして、村長の家に連れて行かれた。道中、死体が藁のように積み上げられていて、その中に両親がいたことを覚えているよ。顔は埋まっていたが、見知った着物の柄が見えたんだ。

やがて村長の家についた。そこでは、村を襲った賊たちの頭領が、品定めをしている最中だった。

子供を並べてな。

一人一人、呼び出すんだ。

そして、傍に立たせている一人と、呼び出した一人を、

見比べる。

頭領は氣に入った方を残し自分の隣にやって、もう一人を殺す。恐らく、そういう趣向だったのだろう。

恐らくというのは、俺が見たのは終盤の頃合いだったようだな。最後の子供たちを見比べて、片方を正に殺した直後だった。

残っていたのは、隣の隣の家の娘だった。

俺よりひとつ年上だったかな。手先が器用だと評判で、よく互いの家の網を繕い合っていた。俺たちは、村の中では比較的大人しい子供の部類だったから、よく気が合ったんだ。

だが俺は、彼女が死んで安心した。

彼女と俺の妹が比べられて、妹が選ばれたからだ。

そこまで来た辺りで、俺は周囲の賊たちの会話から、今何が行われているのかようやく把握していた。

彼らの頭領は小さい子供が好きで、一番氣に入った子供一人だけ残して酒の酌をさせるらしい。そして、子供はできるだけ若くて可愛い子供がいらしい。

俺はますます安心した。

だから最後に、俺とあの子が比べられた時、俺はすっかり油断していたんだ。

だって、あの子が残ると思うだろう。

死ぬのは俺だと、思うだろう。

あの子は俺より小さくて、若くて、可愛い娘なのだから。だが死んだ。

あの子は殺されて、俺が残った。

なんで、と思った。

どうして、と思った。

笑っていたら、よかったのかもしれない。俺とあの子は、笑うとそっくりだから、笑っていたなら娘であるあの子が選ばれたのかもしれない。そう思っても、全て後の祭りだった。

茫然とする俺の腕を、頭領が掴んで、家の奥に入って、それから……。

まあ、だから、これでよかったんだとその時は思い直したんだ。

痛かったし、怖かったし、辛かった上に、「今夜もう一度楽しんだあと殺すのだろう」とはつきり解ったからだ。

あの子がこんな目に合うくらいなら、俺でよかった。

でも、また、俺は生き残ってしまった。

美しい——劍が、な。

湊を真っ赤に染めて。

村人も、賊も、俺以外誰も残らなくて。

夢のようなあの月を、俺は追いかけて。

そして師匠に出会って、俺は『宮本伊織』になったんだよ。

だから、この話は終わりだ。語っても意味のない話、なんだが。

お前とこうしてみて、思い出したんだ。

なあ、セイバー。何故だったと思う？

なぜ、俺だったのだろう。

どうして、俺だったのだろう。

お前との魔力供給よりも、あれはずっと辛かったが……だがそれでも、俺は死ななかった。生き残った。ここまで生きた。

なあ、セイバー。なら、あの子ではいけなかったのだろうか。

俺が笑っていれば、そしてあの子を笑わせることが出来れば、もしかすれば。

あるいは、それでも駄目だったのだろうか。俺がよかったのは、そういう由^{よし}ではないのだろうか。

セイバー。教えてくれ。

お前になら、解るのではないか。

あの男と同じ欲を、俺に向けたお前なら。

逆行剣鬼伊織くん

く私の喚び人、
私のことが好きすぎるく

「セイバー、食べるか？」

「セイバー、これも旨いらしいぞ」

「セイバー、お前好みの味だと思う」

「セイバー、どうした？ 気になるものがあるのか？」

「セイバー」

「セイバー」

「あああもう！ 何なんだきみはー!?」

叫ぶと、男はきょとんとした顔で瞬いた。

タケルの喚び人は、人々の行き交う華やかなる往来の真ん中で、不思議そうに首を傾げる。

「気に入らなかつたか？ その団子」

ならばそれは俺が片付けて、別の味を——などと言いなから手を伸ばしてくるので、タケルは慌てて身を引いた。

「そんなことはない！ これは旨い、だからやらぬぞ！

……別の味もあるのか？」

「ああ、あるぞ。食べたいか」

「……ま、まあ、献上するというなら各々ではない。だが

」

「買ってこよう。此処で待っている」

「待て待て待て待て!!」

ヤマトタケルは皇子である。

畏れられ厭われた血塗れではあるが、皇子は皇子。傳かれるのは息をするように当然のことだった。

だが。

「限度と云うものがあるだろう!」

確かに、タケルが望んだことではある。

この時代は——エドは、平和で、血の気配は薄く、人が満ち、みな明るく。あちこちに見たことのないものがあり、嗅いだことのない芳しい香りがあつた。その全てにタケルは興味があつたし、味わってみたいと思つた。

「だからと云つて、片端から買うか!? きみにそんな余裕があるようには見えぬが!」

何せタケルの喚び人が住んでいるのは、廃墟と化した倉のようなナガヤという建物で、とんでもなく狭い上、天井に穴まで空いている。

タケルが召喚されたのは昨晚である。敵を蹴散らし、ナガヤに迫り着いて間もなく、喚び人は氣を失うように眠ってしまった。英霊であるタケルは眠る必要がないので、夜番がてらこの拠点を観察していたのだが、まったく酷いものだった。遠征を繰り返していたタケルは生前どんな場所でも休めたものだが、せめて屋根は欲しい。

「セイバー、屋根は昨日壊されたんだ。修繕費がなくて放っておいたわけではない」

「だったとして、やはりきみの羽振りがよいようには見えぬが？」

例えば、室内にあった布類は、どれも使い古されて襦袢ぼろ切れ寸前であった。というか襦袢ぼろであった。

この時代はこうしたもののかと思つたが、エドの町並みを眺めていると、どうにも違う気がした。タケルの喚び人はかなり貧しい寄りの存在なのではと察する。

「……」

「……きみ。どういう顔だ、それは」

「驚いているんだ。おまえが俺の懐を気にしてくれるなんて。そんなことができたとは、知らなかった」

「私を馬鹿にしているな？」

タケルは生来皇子であるし、そもそも貨幣制度も曖昧な時代の出身なので、金勘定には縁遠い。

が、銭がなければ米は食えぬ、程度のことは解るのである。

「相すまん、そう臍へそを曲げてくれるな。そら、この甘味も旨いぞ」

「なんだその言い草は！ 私は童わらわではないぞ！」

「いらんのか？」

「い……いらんくはないが！」

差し出された串を奪い取り、かぶりつく。先ほど食べた

団子の、味違いのようである。甘塩っぱくて実に旨い。

食の悦びと、喚び人への苛立ちが混ざって、タケルは曖昧な表情のまま咀嚼に徹した。

その姿をタケルの喚び人は——イオリは、見ている。

行き交う人々すら振り向くような、他者を思わず絶句させる、

「——」

花が綻ぶような、春の微笑みで。

「……きみ、は」

「うん？」

「……、……………」

ヤマトタケルは見目が良い。

自覚がある。自負がある。血塗られ厭われ恐れられた人生だったが、容姿に惹かれ近寄ってきた者たちは多くいた。

だが、この男は違う。

イオリは、違う。

「セイバー？」

この瞳を知っていた。

視線の意味を知っていた。

タケルの全てを変えたひと。空の色、風の匂い、川の音色、陽の輝き、人の熱……世界の尊さを教えてくれたひと。

オトタチバナヒメ。

男がタケルに送る視線は、彼女のものとあまりに似ていた。

「……なぜ」

召喚されたのは、昨晚のことだ。

タケルとイオリが出会って、まだ一日もたっていない。

なぜ、この男はそんな目をするのか。

なぜ、そんな顔を向けてくるのか。

血塗れの皇子に向けるにはあまりにそぐわない……柔らかな、眼差しの。

「きみは、頭が狂っているのか？」

「……そう見えるか？」

「でなければ、誰彼構わず情を振りまく、度を越したお人好しとしか思えぬが。そんな振る舞いでは、すぐに死ぬな」

再び目を瞬かせるイオリを見たタケルは、しまった、と思った。

意図とは違う受け取り方をされた気がする。否、そのような言い回しをしてしまった気がする。

生前から、何でも結論だけ口にしがちであった。弱き者——即ちタケル以外の人間たちは、みな己の言葉を理解できていないのだと気づいたのは晩年だ。タケルの真意を理

解してくれたのは、オトタチバナヒメただ一人——

「心配は無用だよ、セイバー」

——だったのに。

「儀の厳しきは解っているし、俺がこれほど気にかけるのはおまえだけだ。……おまえが嫌だ、不気味だ、気味が悪いと思うならば、態度を改めよう」

「そ、そこまでではないが……」

「そうか。良かった。お前ならきっとそう云ってくれると思ったが。何せ、江戸の食事は旨いだろう？」

「……おちよくっているのか？」

「まさか」

男は悪びれず、ただ悪戯^{いたずら}っぽく笑った。

その一方で、視線の色、瞳に映る真心だけが変わらないから……タケルはどうすればいいのか解らない。

イオリが新たに購入し、渡してきた菓子を手にしたまま（欲しいなんて云っていない。まだ。いい匂いだとは思ったが）、タケルはどこか途方に暮れた気持ちで呟いた。

「……きみが何をしたいのか解らぬ」

媚びるなら解る。

畏れ敬うならこれも解る。

だというのに、なぜ。

「俺のしたい事など至極単純だよ、セイバー。盈月に捧げ

る必要もない願いだ」

「……ほう。盈月が要らぬ、と？」

「正しくは、盈月ではなく己の手で叶えたい、だな」

その気持ちなら、解ると思った。

今のタケルは己の願いを覚えていなかったが、云われてみれば同じだった気がする。

万能の願望器にかけるような願いでは、なかったはずなのだ。

もっと細やかで、穏やかな、タケルにとっての愛^{オトタチバナ}そのものに似た。

気づけばイオリは、微笑ましげに目を細めていた。タケルの気持ちを——切なる心、祈り、愛惜を、全て理解した上で見守るように。

「俺は、おまえの願いを叶えてやりたい」

それから、そう告げた。

「盈月などではなく、俺自身の手で、おまえを喜ばせたいんだ」

「な……」

「なぜ、とは問うてくれるなよ」

「そ、それは……、……なぜだ」

「……面映^{おもはゆ}だろう」

由^{よし}は一つも解らない。

推測できる材料すらない。

それでも彼の、はにかんだ笑みを見れば、ほんの少し赤らんだ頬を見れば、誰にだって明白だ。

この男がタケルに向ける真心は、疑いのようなない本物である。

恥ずかしいくらい真っ直ぐで、戸惑うくらい大きく深い、本当の、真実の、純真な心である。

だから、やっぱり、タケルはどうしたらいいのか解らなかった。

「そ、……そう、か」

ゆえにそれだけ云うと、手に持ったままだった菓子を食べることにした。

どうやら、薄く焼いた米のようである。これも旨い、と誤魔化すように思いながら、無言でもそそと食べていると、

「ん。セイバー」

イオリの指が、触れた。

唇の端を掬う。菓子の欠片。ぱくりと、食べて。

「ついでいたぞ。ふふ」

いっとう大切なものに向ける顔で。

まるで、世の何よりも尊い宝になったと勘違いしてしまふような、酷くあたたかな眼差しで。

慈しみに似た、憧憬に似た、恋に似た、愛に似た……あ
るいはその全てを宿す、酷く酷く、美しい微笑みで。

「……………あ、ぐ、う」

「セイバー？ どうしたんだ、先ほだから」

どうしたもこうしたもない。

この男。

この男……。

この男!!

「わ……」

「わ？」

「……………私を、見くびるなよ」

この程度で懐柔出来るなどと思うな。

きみは何かを隠している。

私はきみを信用しない。

というような事をタケルは云った。精一杯、凄みながら。

まさに童^{わらべ}の虚勢が如し、などと思う勿^なれ。腐ってもタケ

ルはヤマトタケルである。神魔を塵殺せし戦の天才の気迫

は、虚勢であっても、大の男どころかものの怪すら怖気付

かせる。

だが腹立たしいことに、イオリはどこ吹く風だった。

「では、信用に足るよう努めよう」

暗い夜を照らす満月のように、男は優しく微笑んだ。

異世界イオリ

〈1周目ED後に異世界召喚されたら男の聖女になった件〉

死なんて、こんなものなんだと思った。

もつと怖くて、痛くて、辛いものだと思っていた。実際、ほんの少し前までは、その全てが全身を蝕んでいた。

いまは違う。

僕は岩陰に座り込みながら、喰いちぎられた腹を抑えていた。

自分の血で地面が赤く染まっていくのを眺める。ついさっきまでは恐ろしくて仕方なかったのに、もう何も感じない。

ただ、冷えているだけ。

太陽はまだ高いのに、深い夜の底にいるよう。いまでも響いているはずの、憎き魔物たちの咆哮も、一緒にしんがりを務めた兵たちの雄叫びも、聞こえない。この戦場がどうなったのかわからない。わからないけどどうでもいい。だって、もうすぐ死ぬのだから。

（ああ……寒いなあ）

不思議なほど感慨もなく思った……その時。

「貴殿。まだ息はあるか」

男が、いた。

身長のおかげか、僕よりは歳上に見える。けど顔立ちはやや子供っぽかった。僕の知るどんな人とも違う雰囲気です。もしかしたら異国人というやつなのかもしれない。

そんな余計を考えることしか、僕にはできなかった。もう声が出ないのだ。

つまり返事はしなかったのだが、その人はなぜか、全部わかったみたいに頷いた。

「意識もあるな。ならば大丈夫だ」

男が膝をつき、僕へ手を伸ばす。

途端。

光、が。

「……あつた、かい……」

「こら。まだ喋るな」

柔らかく叱りつける声。

優しい温もりを宿す指先が、すっかり消えた傷口を撫でた。

「さあ、もういいぞ。立てるか？」

呆然としていた僕に、笑いかけてくる。

だからやつと、その人の格好のおかしさに気づけた。

鎧を着ていない。兜もない。少なくとも兵士じゃない。

マントも付けてないから、将官とも違うだろう。

代わりに纏っているのは、法衣だった。あちこち破れて血に塗れているが、間違ひなく紺碧と純白の——限られた者にしか許されない禁色を使った——。

「聖女、さま？」

乾いた大地に、斬り裂かれた魔物の屍ばかりが落ちていて、静寂の戦場で。

とつくに退避したはずの、人類最後の希望が一つ……聖女イオリ様は、少し困ったように言った。

「……その呼び名は、なかなか慣れんな」

・・・一ヶ月前・・・

理解した。

「この国は長年マゾクという妖物魔物と戦いくさをしている。そして国難の折は彼方よりもののふを招き、特別な力を与え加勢を乞う伝統がある、と」

「呑み込みがお早い」

ダイシキヨウと名乗る異人が頷くのを見てから。
逸はやらぬよう己を戒めつつ、伊織は尋ねた。

「では俺はユウシャとして、マゾクと剣を交えればいいのだな」

「違います」

「えっ」

そんな馬鹿な。

……いや、聞き間違えかもしれない。

伊織は再び尋ねた。

「俺はユウシャとして、戦えばいいのだな？」

「とんでもございません！ イオリ様は勇者なぞではなく、更に高貴なる存在——聖女様なのですから」

「セイジヨ？」

異なる世界からイセカイシヨウカンされた者は、ユウシャというクラスを与えられると聞いたばかりだが。

「いえ。異世界より招くのは、勇者と聖女のお二人。そして勇者は既に召喚され、軍を率い前線にあります」

「……そうか」

「歴代でも特に優れた力を持つらしく、魔軍を見事に押し返しまして。おかげでこの聖王都は、平和そのものではないでしょうか」

「そうか……」

確かに、戦の最中に見えないとは思っていた。何せ喧嘩の一つも見当たらない。儀のち益々泰平となったあの江戸よりも、更に風いだ世と云える。

「ではセイジヨは何をする？」

「魔族の放つ瘴気は、大地に染み込み、人に害を及ぼしま

す。勇者は魔族を倒しても瘴気には無力……聖女様だけが、
聖なる浄化魔法を為せるのです」

「成る程。ではユウシャの加勢のため、前線に——」

「ええ。まず前線にいる勇者が土地を取り返し、安全を確保します」

「……」

「そのち赴いて、浄化魔法を用いてくだされば。ご安心ください、危険などございせん。神聖騎士団が必ずやお守り致します」

「……………」

「イオリ様。どうかその御力で、無力な我らをお救いください」

ダイシキヨウは、真摯そのものな様子で云った。

瘴気ある限り、土地を追われた民たちは帰れない。田畑がなければ米は食えず、ただ餓死を待つばかり。それを見捨てるなど、悪しきこと。許されぬことだ。

ことだが。

「……ユウシャを喚んでは、どれ程たつ？」

「一年ほど。既に多くの土地が人類の手に戻っていますが、いまだ瘴気渦巻くままです。しばらくはお忙しいかと」

「そうか……………」

どうやら。

今度は——喚ばれた時機を間違えたらしい。

・・・時は進んで・・・

僕があゝの戦場でイオリ様に救われてから、しばらくあと。
「で、そのあとどうなったんだよ？」

対魔軍戦の前線基地。

その食堂で、今日同じ部隊に配属されたばかりの同僚に、
僕は質問責めにあっていた。

断ろうにも、夕食のメインディッシュを半分貰ってしまった。僕は成長期なのだ。肉は惜しい。

「どうせ噂で知ってるだろ。……帰投しようにも、どこに魔軍が潜んでるかわからなかったんだ」

あの日のことを思い出す。

僕のような新米兵にまでしんがりの務めが回ってきたのも、そもそもは魔軍の奇襲攻撃のせいだった。

いるはずのない軍勢による、完全な不意打ち。主力部隊は拠点ごと壊滅、駐屯兵たちは大混乱になった。それでも戦えない人々と、何より聖女イオリ様だけは逃すために、

僕たちは戦ったのだ。

もちろん全員、死ぬ覚悟で。

「おひとりです戻ってこられた聖女様のおかげで、何人かは生き残れたけどね」

「聖女様の治癒魔法かあ。切れた手足も治るくらいスゲーって話だもんなあ」

「それで、生き残ったみんなで聖女様をお守りしながら、一番近い砦に逃げようとしたんだ。でもダメだって、聖女様が」

「なんでだよ？」

「砦の方向に進むと、避難民たちの逃走経路と重なるって。あの奇襲は聖女を狙ったものだったから、彼らに危険が及ぶかもしれないって」

「現代の聖女様、やっぱスゲーいいお方なんだなあ……！」

ちよっと引くくらい目を輝かせた同僚は、「それでそれで？」と続きをねだってくる。

「だから別の砦を目指そうと、東の大瀑布を突っ切ることにしたんだ。魔物もいるし危険だけど、少人数で身を隠しながら進んだ方が見つかりにくいと思って。それに……」

東の大瀑布は、王国領東南部の水源地だ。

ずっと前に魔軍の手に落ちて、勇者様によって取り返さ

れたのだけれど、瘴気は残ったまま。

「下流の民たちが被害を受けてるはずだから、ついでに浄化したって仰られて」

南東は貧しい村が多い。イオリ様が希望しても、危険な場所だからと後回しにされたという。

「そういうお方なんだよ。困ってる人がいたら『見捨てるなど悪しきことだ』なんて言って、すぐ助けちゃう。寄り道ばかりだった」

結局、想像より長い旅になった。

聖女が行方不明の間、国は大騒ぎだったという。砦に辿り着いた時こっぴどく怒られた上、こうして前線送りになってしまったくらいだ。

なのに反省なんてできないほど——輝くような、旅だった。

「……そっか」

同僚はそう言って、更に一皿突き出してくる。

デザートだ。戦場じゃ滅多に出ることはない、大事な甘味。

「さすがに貰い過ぎじゃない……？」

「いいんだって。……おれさ、南東のど田舎の生まれなんだ。母ちゃんと妹たちは、まだそこに住んでる」

水が瘴気に侵されると知ってても、飲むしかなかった。

病に倒れる者が出て、どうしようもなかった。

「聖女なんて、どうせ貴族どもの操り人形じゃねーかって思ってた。それも男の聖女なんてさ、目のホヨーにもなんねーし、ホントくだらねーって。でも、でもさあ……」

その先を、同僚は言わなかった。

僕も聞かなかった。

ただ。

「……なあ、お前から見てさあ。聖女様って、どんな人だった？」

「あの方は——」

ただ、思い出す。

あの日のこと、あの寒さのこと、そしてイオリ様に貰った柔らかな光のことを。

「——夜を照らす、月みたいに。優しくて眩しい人だったよ」

「あ、あの……お呼びと伺ったのですが」

「入れ」

失礼します、と扉をくぐってきた兵は、酷く固い面持ちであった。

そう固くなるな、と云おうとして、やめる。

自軍の将を前にして、新兵が緊張するなど当然だからだ。それも彼ら曰く『人類最後の希望』とやらが相手では、いわんやだろう。

「勇者タケル様。僕なんかを私室にお招きくださり、その……何かご用でしょうか？」

英霊としてエドに喚ばれ、エドを守り、エドと別れ、座に帰——れないまま何故か異郷でユウシャとして再召喚されたヤマトタケルは、静かに頷いた。

「聞きたいことがある」

「は、はい」

「……きみは、東の後方拠点が壊滅した時の生き残りと言いた。本当か？」

「はい、本当です。えっと……もしかして、聖女様のお話ですか？」

「セイジヨか……。まあ、気にならぬわけではないが」

最近セイジヨとやらが召喚され、タケルが敵軍を叩き出した地の瘴気を、尋常でない勢いで浄化しているとは聞いた

・・・その日の夜・・・

ていた。

タケルはずっと前線にいたので詳しくは知らないが、酷く勤勉かつ心優しい者なのだと思う。

「そうだな、念のためこれも聞いておくが。今代のセイジョは、男子おのこなのだな？」

「そうですけど……」

「間違いないな？ 可憐な少女……そうだな、きみに少しだけ似た顔立ちの、緑がかった黒髪を持つ媛ではないかな？」

「黒に近いですが茶髪で少し、少女でもないですね……。歴とした男の方ですよ」

「そうか……。よかった」

ユウシャとセイジョに共通するのは、同じ世界の者という点のみらしい。縁ある知人であることも、全く関わりのない他人同士なこともあるという。

だがタケルは不安だった。盈月の儀と同じく、タケルの現界と連鎖して、吾が妻が喚ばれてしまったのではないかと。

もう彼女には、争いのあるところにてほしくない。

否。彼女でなくとも、もう弱き者を死なせたりはしない。そういうやり方を、そういう善を、タケルは教えてもらったのだから。

「感謝する。……だが、本題はまた別にある。私が聞きたかったのは、後方拠点が奇襲を受けた、その時の様子についてだ」

「様子と言われましても……。僕たちもわけがわからなくて、報告した以上のことは何も……」

「些細なことでもいい。情報が欲しい」

不可思議なことに、今のタケルは受肉している。

つまり霊地争奪戦の折とは違い、霊脈に乗り駆けることが出来ない。

「あのような奇襲を繰り返されれば、私が前線にいる間にも落ち、弱い者はみな死ぬぞ」

「……っ！」

「怯えるな。そうならぬために対策を練るのだ」

愚かにもこの地の大王——国王や貴族は、これがいかに危急の問題かわかっていない。

どころか、『セイジョを守り切れなかった責任』を巡り、教会とことを構える様子である。心底くだらない政だ。

とはいえ、朝廷などこのようなもの。慣れている。

ゆえに己が対処しなければならぬ。

悪を斃すだけでなく、弱き者たちをこの手で守る。善のみでなく正しきも成す。やってみせる。

タケルを光の方へ送り出してくれた、タケルの願いを叶

えてくれた、大切な彼に誓って。

「案ずることはない。私は勝つ。必ずな」

だからクサバノカゲから見えてくれ、イオリ。

頭の中のイオリが「勝手に殺すな、セイバー」と口を引き纏らせる。

タケルは少しだけ、笑った。

・・・同時刻・・・

伊織は追われていた。

「お待ちください聖女様！ 聖女様あ！」

後方から神聖騎士たちの声が聞こえる。猛烈な勢いで近づいてくる。

やはり、速い。

この世界の兵隊は、一流の剣士からあどけない新兵に至るまで、殆ど全員が英霊並みの力を持つ。

彼らと比べると、伊織は余りにも弱く、脆いらしい。ユウシャであれば彼らを上回るクラス補正を受けられるとの

ことだが、セイジョは浄化と回復特化で、武力面での恩恵は皆無である。

その上、セイジョしか瘴気の浄化は出来ぬというのだから、媛のように大事に困い込みたがる気持ちも解る。解るので、虚をつき抜け出すのも容易かった。

「あ、あの……聖女様……」

おずおずと、伊織と併走して飛ぶ少女が云った。

虫のような翅を持つ、小さな人間である。ふえありー、というらしい。

「亜人であるわたくしたちの願いを聞いてくださったこと、感謝しますわ。でも、このままでは……」

「貴殿の察する通り、じき追いつかれるだろうな」

そうなれば、この少女を助けてやることは出来ない。

どうにもアジンは、人でありながら差別を受ける種族らしい。彼女が云うには、ふえありーたちの命の拠り所である神木・セカイジュが、瘴気に侵され枯れる寸前なのだが、助けが来ないのだという。

無論、王に奏上し、浄化の優先度を上げるよう頼んだが、聞き入れられなかった。いよいよ後がなくなつたため、先兵たるこの少女が密かに侵入、伊織へ直談判に來たのだ。

「あそこまで事情を聞いて見捨てるなど、人として許されぬことだ。それに土地の浄化順は、俺も疑問に思ってい

た」

この世界では、伊織は火遁を使えない。どうも魔術の理が根本から違う。

だが、同じ箇所もある。

とりわけ霊地霊脈についてはそうで、かつて儀で行った霊地争奪戦と同じく『囲み』が有効である。つまり、瘴気の地の周囲を浄化し流れを断てば、合わせて勝手に浄化される。

気づいて早々に報告し、浄化する地の順番を変えるべきだと訴えた。

「だが俺の話も聞き入れられなかった。諸々の事情はあるのだろうが……あのままでは、困る」

一つ一ついちいち浄化していたら、いつまでたっても終わらない。飛龍の勢はないしアリアもない、手分けしてくれるセイバーすらないのだ。

ユウシャは今この瞬間にも、破竹の勢いで勝利し続け、前線を押上げている。

このままでは、いつまでたっても追いつけない。

追いつけないままでは——悔いが残る。

「一刻も早く瘴気を祓わねば、人々に更なる害も及ぼう。俺としても本意ではない」

「……民のために……。ああ……。本当に、お噂通りのお方

なのですね……」

「噂？ ……いや、後にしよう。そろそろ目的の場所だ」

「いたぞ!! 聖女様だ!!」

伊織が崖の端に辿り着くのと、騎士たちに追いつかれたのは、同時だった。

「さあ、聖女様。お戻りください」

「外ならば、明日我らと共に行きましょう。夜は危険です」

騎士たちから目を離さないまま、じりじりと後退する。

左足が、淵に辿り着く。

「ああ、危ないっ! 聖女様、それ以上は!」

「谷底に落ちてしまいます!」

「そうだな」

伊織は云った。

そして、そのまま飛び降りた。

「うわああああああああっ!?!」

「聖女様あー!ー!ー!ー!!!!」

「な、ななな、聖女様なにをなさってえええええ!!?!」

「案ずるな。死にはしないさ——回復すればいい」

セイジョに与えられた治癒の力は、貴石を使う必要がなく、体の疲れも一切ない。魔力が無限に湧いてくるのだ。

これこそが今の伊織の持つ、最大の武器である。

召喚されてからずっと、伊織は考えていた。

英霊並みの兵すら脅かす魔軍と、未熟な自分がどう戦うか。

つまりあの東の後方拠点で、しんがり殿を全滅させていた魔物たちを、どう倒したか。

即ち、無限の回復——全員死ぬまで死ななければ、勝てる。そういう寸法である。

などと落下しながら思う伊織に、ふえありーの少女が必死に羽ばたき追いついてきた。

「死にますわよ!?! この高さから人間が落ちたら一発で死にますわよ!?! 死んだら回復できませんよね!?!」

「確かに一度は死ぬが、一度なら問題ない」

火遁が使えないため、風の型は封じられたも同然である。だが他の型ならば、儀の頃より変わらず身についている。

「起死回生・極があるからな」

「なんなのですそれは!?!」

「そういうええ昔、セイバーにも同じことを聞かれたな

……」

まあ剣技の一つというか。

気合い、としか云いようがないのだが。

・・・二ヶ月後・・・

勇者タケルは、王城を歩いていた。

マゾクの本拠たるマオウジョウではない。タケルをこの世界に喚び救いを求めてきた弱き者たち、即ち人間たちの城である。

「……はあ」

夜である。

天井の高い廊下は、全くの無人だった。タケルの足音だけが冷たく響く。

無論、おおきき大王——国王のおわす場所なのだから、夜だから

と云って、全くひとけがない事などありえない。警備の兵や下働きがいるはずだ。

しかし今は、誰もいない。皆、この廊下と、この先にある部屋だけを避けている。

城の者曰く、これは配慮だった。

異なる世界の者の多くは、こうした事を見られるのを酷く嫌がるらしい。皇族であるタケルの感覚ではよく解らないのだが、相手はただの民草だったそうだし、異なる常識で生きていたのだろう。

相手——即ち、タケルが向かっている部屋にいる相手。

勇者と対で召喚される、セイジョ。

タケルは、彼女と褥を共にするために此処にいた。

より正しく云うならば、彼女と子を作る——「ユウシヤとセイジョの血を継ぐ子を作る」ために、前線から呼び戻されたのだった。

「いや、セイジョは男だったか。それでも子を成す秘術があるとは、イセカイとは恐ろしいものだ」

声には呆れが滲んでいたが、咎める者もない。

そもそも今タケルが王城にいるのは、騙し討ちみたいなものだった。これより前の直接の誘いには、毎度「まだ前線を離れられない」と断っていたのだ。

魔族との戦いは終わっていない。魔軍四天王のうち二匹は倒したが、二匹は未だ健在である。

それに、あちこちで発生する『謎の奇襲』の対策も必要だった。タケルは忙しいだ。

だから「王都で奇襲の有力情報を掴んだと思っただけ気のせいでした」というくだらない謀りをされて、怒って、宥められて、もう全部諦めたのだった。

子が欲しいならとつと作ってやればいい。生前もあった事である。気にならないとは云わないが、気にしている余裕はない。

セイジョの方が嫌がっているなら話は別だが、向こうは初回の打診の時から承諾していたという。男だというのに、なかなかすごい話だが。

「まあ、そもそもセイジョが行方不明になりすぎるから、王たちもこんなに急いでいるらしいし……。自ら責任をとろうとしているなら、私に云うべき事はないか」

問題は、男など抱けるかだが、これも秘策を渡された。懐に忍ばせている小瓶に入った薬は——そういう事であつた。

「——さて、此処か」

部屋は、廊下の突き当たりであつた。

豪奢で複雑な装飾の扉を、タケルは特に気負いもなく叩いた。

「入るぞ」

訪うのに淡泊すぎる文句はよくない、とかつて妻オトタチバナに怒られた気がする。

とはいえ女人でないなら構うまい、と思いなおす。

と、「どうぞ」という返事が聞こえた。

聞こえたが。

「……？」

何か違和感を感じた。どこか、懐かしいような。しかし掴めなかつたので、一拍置いて、とりあえず扉を

開ける。

部屋は広く、だが単純だった。

テンガイ付きのベッドとかいう寝具の、酷く大きいものが一つ。それだけ。

あからさま過ぎる部屋の作りにタケルは呆れ、だがすぐに、そのベッドに腰掛ける男の姿を見て、目を見開く。

見慣れぬ、紺と白の法衣を着ているが。

解とかれていた黒に近い茶髪は、丁寧に手入れをされたらしく、記憶より艶があるが。

丸い天窓から入る月光に照らされた、その顔は。

「——イオリ!？」

「セイバー……!？」

かつてタケルを光の方へ送り出し、タケルの願いを叶えてくれた友——宮本伊織だった。

・・・その後・・・

世界樹を浄化し、四天王の一体と刃を交え、敗北したが

なんとか逃げ延びたあと。

伊織は軟禁された。

聖女は国の要が一つ。これ以上の危険は目にあまる、との由である。

次いで、相変わらずの勢いで前線を押し上げる勇者の噂を耳にする。

そして血統保存の話聞かされ——思ったのだ。

勇者が王城に戻ってきさえすれば、無理矢理にでもついでいける。

そのためなら、多少怪しい魔法をかけられてもやむなし、と覚悟したわけだった。

「相変わらず無茶をするな、きみは……」

「聖女の力なら、臓腑を変成する魔法も解除できるからな。あとはその事を黙って『一度では無理だったゆえ、励むいため共に前線へ行く』と云えばいい」

「あまり上手い云い訳には聞こえぬが。危険だと許可されなかったらどうするつもりだったのだ」

「また別の手を考えるだけだ」

セイバーは呆れた様子でため息をついた。

「まったく。儀より一年もたったのだろうか？ こんな成長が見られぬ調子では、カヤの気苦労も絶えまい」

「その心配はないだろう。……俺たちはもう、戻れんらし

いからな」

「……」

伊織の言の葉に、セイバーが目を伏せた。

月の光を浴びるかれの姿は、儀の頃から何一つ変わった様子が無い。

だから伊織は、余計な策など考えず、ただ真っ直ぐに頼んだ。

「セイバー。俺も一緒に連れて行ってくれ」

「……」

「数ヶ月、このイセカイなるものを見てきた。此処は泰平の世ではない。誰もが生き残るため戦っている。このような状況で、媛のように後ろで守られ続けてはいられん。俺は聖女である以前に、剣士なのだから」

「……………はあ。本当に、きみは変わらぬなあ」

「セイバー」

「わかった、わか——」

と。

突然、天窓が割れた。

「なっ……………!?!」

「イオリ!!」

セイバーに突き飛ばされ、伊織は壁に叩きつけられた。

「……………つ!!」

意識を手放しかけて、なんとか踏みとどまる。

ぐらつく視界を叱咤し、伊織は状況を確認した。

此方に背を向けて剣を抜く細い背中。セイバー。

ベッドの淵。巨大な赤黒い塊。

硝子の破片と共に落ちてきたモノだ。つい先ほどまで伊織が座っていた位置に陣取って、粘ついたヘドロのような肉体から、細い触手を何本も伸ばしている。

「はあっ!!」

清水を纏った一閃が、触手たちを斬り落とす。

残骸がべちゃりと床に落ちて、しかしそれに頓着なく、次が現れる。

「馬鹿な、どこからどうやって現れた……………!!? ……………くつ、こやつらキリがない!!」

「セイバー、宝具は放つな! その方向には見張り塔がある!」

「解っている! この程度の魔族なら——いや」

セイバーが後方に跳んだ。伊織のすぐ傍まで。

突き飛ばされる寸前に握った刀を抜き、構える伊織を見上げて、不敵に笑う。

「共に、行こう。……………まさか、忘れたとは云うまい?」

「……………ああ」

伊織は。

頷いた。細く息を吐いた。
敵を見た。

『』
伸びてきた次の触手を、セイバーが払い。

「行くぞ！」

二人で同時に踏み込み、二人で無尽の剣閃を放つ。

共鳴絶技——驟雨斬。

『』！

声なき声を上げて。

魔族が倒れる。

赤黒い塊がどろりと溶けて、床にぶち撒けられる。

「……」

伊織は無言で剣を振り、刃についた液を払った。

その様を、セイバーが驚いた——否、戸惑った顔で見えてくる。

「きみ……。いや、そうか……」

「勇者は異世界召喚の際、神仏の加護が与えられると聞く。

……まさか、元より尋常ではない英霊にすら施されているとは。驚いたな」

「……………イオリ。本当に、前線に来る気か」

「ああ」

弱い。弱過ぎる。

セイバーは口にこそしなかったが、その眼で如実に語っていた。

事実、先ほどの絶技においても、殆ど役立てなかった。決定打となる攻撃は全てセイバーのものであって、伊織は触手の一本も断ち落とせていない。

無論、不可能ではない。一撃二撃では無理なだけだ。

この異郷で、ただの人間である伊織が魔族を倒すには、百の千の手数が必要。

だが、手数があれば倒せる。

倒せるのだ。

「あの儀において、おまえに追いついたとはいかんまでも、足手纏いにならぬ程度の力量はついたと思ったのだが。また離されてしまった」

「……」

「だがセイバー。これもまた、儀の時と同じだ。おまえは俺を弱いと云った。だが最後には背を預けてくれたろう。今回もそうなる。してみせる」

「……………それは、」

「セイバー。後生だから」

いつかのように懇願する。

こうすれば、かれは聞いてくれると知っていたから。

「……………一つ、約束せよ」

やがて、セイバーは云った。

「この戦が終わったのち、カヤの元に帰る。必ず、生きて帰る。そう約束せよ」

「……俺たちは、元の世界には帰れない。そう云われただらう」

「云われた。だが、古い時代に例がないわけではない。前線で兵たちに聞いたのだ。マオウの持つ秘術で、元の世界へ戻った勇者と聖女の伝説がある、と」

「そう……なのか……」

「私はマオウを倒し、きみをカヤの元へ帰す。だからきみも、約束せよ」

セイバーの眼が、伊織のそれを真っ直ぐ射抜く。

「よいな？」

覚悟と決意に満ちる、澄んだ眼差しだった。

先ほどは、儀の頃から何も変わらないと思っただ、違う、と伊織は思い直す。

かれの剣には、新しい道理があった。悉くを薙ぎ倒す王者の剣、その本質はそのままに、研ぎ澄まされた何かが閃いていた。……それが何かは、解らないが。

「解った」

首肯する。

「約束しよう。……これでいいか、セイバー」

「うむ！」

セイバーはからりと晴れたように笑った。

「まったく、きみのような喚び人を持つと苦勞する。ああいや、もう我らは喚び人と英霊ではないのだったか……」

「おまえはもう英霊ではないのか？」

「そうであるようなような。受肉しているのだ。霊体化できず、他者の魔力ではなく己が生氣によって動く、つまり生きた普通の人間と同じだな」

「普通の人間……」

「そうだ。きみと同じ、今を生きる人間だ。うん、だから今度は——」

視線が一度逸らされ、すぐに戻ってきた。

月の青白い光の下、セイバーの頬が少し赤らむのを、伊織は見た。

「——友として、きみと共に戦おう」

「……」

伊織が何か、答える前に。

「失礼します!! 先ほどとてつもなく大きな音が——こ、これは!?!」

「うおおおおおお!!? べしやべしや過ぎる……いつ、異世界プレイやばすぎる!!!」

「バカ野郎コレは魔族だろバカ野郎!! お二人共、お怪我

は!？」

一気に騒がしくなった。

駆けつけた兵たちに囲まれて、あれこれ事情を聞かれながら。

(そうなのか)

思考の隅で、伊織は思った。

(俺はおまえにとって、友だったのか。……知らなかった)

あの日、あの夜、あの儀の終わり。

盈月を打ち壊すため、真(まこと)の力を解き放ち、光の中に消えて行ったかれを。

伊織は——美しいと思った。

けれど、それだけだった。

それだけだったのだ。

気合いでもう一個作りました。

ほぼ再録ですが賑やかに。

web オンライン開催本当におめでとうございました！

2025/2/16 Fate/Samurai Remnant FanBook

発行：KATAMICHI

Pixiv ID：980525

※無断翻訳、無断転載、ネットオークション等への出品はご遠慮ください。



(ご意見ご感想いただけると嬉しいです！)

Fate/Samurai Remnant FanBook